

聖書:列王記第二 6章8~19節

説教:目を開いて見えるようにしてください

はじめに

7月の下旬に顔の右側が麻痺してから、困ったことが二つ起きました。一つは口が不自由になったことで、もう一つは右目のまぶたが閉じなくなったことです。目が乾燥してきて痛くなったり、目を守ろうとして涙が沢山でて、視界がぼやけてよく見えなくなることがある。こんなふうになって、つくづく目が見えることのありがたさを感じます。

では、肉の目がはっきり開いていて、視力がはっきりと見えていればそれで大丈夫なのか。残念ながらそうはいかない。聖書によれば、この世界には肉の目では見えなくて、霊の目がなければ見えないものがあると言います。霊の目と言うと初めての方にはオカルトのように聞こえるかも知れませんが、それはいったいどのようなものなのか。また、霊の目でしか見えないものとはいったい何なのか。今日はそこに焦点を当てながら考えてまいります。

## 1 イスラエルとアラム

### 1) 情報が漏れている

いまロシアとウクライナのことが連日報道されていて、戦争というものが身近になってきました。敵を攻撃するために、軍隊のリーダーが作戦を立て、作戦がよければ武器や兵隊の数では劣っていても勝つことができるし、逆に作戦がまずければどんなにすばらしい武器を持っていても負けてしまうことがある。そういうことをニュースで聞いて知っています。

アラムはイスラエルのすぐ北隣にあり、ふだんから紛争が絶えません。あるときアラムの王はイスラエルを攻めるために作戦を立て、どこそこに陣地を敷くことに決めます。ところがその情報が相手側のイスラエルに漏れてしまい、こちらは奇襲作戦でいこうと思ったのに、全部先回りされてしまうという事件が起きます。

### 2) エリシャを包囲する

情報が漏れていることに気づいたアラムの王は激しく動揺します。このままではだれも信用できなくなるからです。すぐにスパイ探しを始めます。ところがそこへ家来の一人がやって来てこう言うのです。12節。「いいえ、わが主、王よ。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語

られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。」

これを聞いたアラムの王はすぐにエリシャの居場所を探らせ、ドタンと言う町にいることがわかると、そこへ軍隊を派遣して暗殺を企てます。

## 2 見えるもの、見えないもの

### 1) 目が閉じられている

ある朝、起きて外に出たエリシャの召使いは、軍隊に取り囲まれているのを見てうろたえます。そんな召使いに、エリシャはこのように言います。16節。「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。」

彼らとともにいる者とは、もちろんアラムの王が送り込んできた軍隊のことです。では、「私たちとともにいる者」とはいったいだれのことか。召使いの目には、エリシャと自分しか見えません。どちらの数が多いかは一目瞭然です。軍隊の兵隊の数が多いに決まっています。ところがエリシャは、こちらの数が多いと言う。エリシャ先生の頭はどうかしたのか。召使いは一瞬そんなふう疑ったかも知れない。それでどうなったか。17節。「そして、エリシャは祈って主に願った。『どうか、彼の目を開いて、見えるようにしてください。』主がその若者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」

エリシャはこう祈っています。「彼の目を開いて、見えるようにしてください。」この召使いが極度の近眼だったとか、見るべき相手が極端に小さくて見えなかったというわけではない。「なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」

火の馬と戦車ですから、どんなに目が悪くても見落とすはずがない。ところが召使いには、目が閉じられていてまったく見えないというのです。

### 2) 肉の目で見る世界

ことわざにも、「百聞は一見にしかず」というのがあります。肉の目に見えるものこそが真実である。それで目という感覚に頼って生活してきて、なにも疑わない。しかしそれで本当に正しいのか。召使いは、アラムの軍隊が自分たちを取り囲んで、いまにも攻め込もうとしている、それを肉の目で見

ておびえました。肉の目で見えるものが、現実  
に起きていることのすべてであって、他に何かあるは  
ずがない。おそらく私たちがこの召使いの立場に  
なっても、同じことを思ったでしょう。アラムの軍  
隊の手で自分は殺される。その恐怖で打ちのめさ  
れて、どこにも希望がない。

### 3) 霊の目が開かれるとき

私たちは軍隊に囲まれるというような経験はし  
ないかも知れませんが、時には似たようなことを  
経験する時があります。人間関係がこじれてし  
まったとき。自分のミスで会社に大きな損害を与  
えてしまったとき。思いがけなく重い病気になっ  
てしまったとき。そんなとき、思わずつぶやきます。  
「まさか自分がこんな目に遭うなんて。」そうい  
うとき、だれも助けてくれません。自分は真っ暗  
闇の中にひとりぼっちで取り残されたかのようで、  
ぶるぶると足が震えてくることある。そんなと  
き、周りを見回してどこかに助けはないかと一生  
懸命探します。いまならすぐにネットでグーグル先  
生に教えてもらおうとするでしょう。とにかく目  
に見える世界に救いを探そうとします。

ところがエリシャはこう言って祈るのです。「ど  
うか、彼の目を開いて、見えるようにしてくださ  
い。」そうしたら召使いの目が開かれて、火の馬と  
戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちているのが  
見えた。それまで、もうだめだ殺されると思ってい  
たのが、実はそうではない。既に自分たちを救う  
者が周りを取り囲み守ってくれていた。まったく正  
反対の光景が見えてきたというのです。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 霊の目が開かれるために

このようにエリシャは、救いを見るためには霊  
の目が開かれなければならないことを示しまし  
た。これを聞いて、皆さんはこう質問するのでは  
ないでしょうか。「では、どうしたら霊の目が開  
かれるのでしょうか。」

このことについて主イエスは、マタイの福音書  
23章25、26節でこのように語っておられます。「  
わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おま  
えたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲  
と放縦で満ちている。目の見えないパリサイ人。ま  
ず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよ  
くなる。」

二千年前のイスラエルでは、律法学者、パリサ  
イ人はユダヤ教の専門家として人々を指導する立  
場にありました。その教えの一つに食事に使う杯

や皿はきれいにしておかなければならないという  
ものがあります。もし汚れた食器を使って食事をす  
れば、それを使った人が汚れてしまうという趣旨  
だと言われています。イエスはこの教えが間違っ  
ていることを指摘するのですが、たとえばこんな  
ふうになるでしょう。

いまはだれかの家を訪ねるときは事前に連絡を  
するのが礼儀です。しかし昔はそうではなくて、突  
然お客さんが訪ねてくるのが珍しくありませんで  
した。私も経験があるのですが、そういうとき、  
あわてて散らかっているものを隣の部屋に突っ込  
み、座布団敷いて、「どうぞこちらへ」と言ってお  
客さんを座らせる。そうやってなんとか体裁を整  
えたと思っていれば、そこへ何も知らない子どもが  
入って来て、ふすまをがらっと開けてしまい、さっ  
き突っ込んだガラクタをお客さんに見られてしまっ  
て恥をかく。律法学者が言っていることはそれに  
似ていて、とりあえず目に見える所をきれいにし  
ておけば問題ない。

### 2) まず内側をきよめなさい

これに対するイエスの教えはまったく正反対で  
す。外側ではなくて、まず内側をきよめなければ  
ならない。たとえば、お客さんを迎えるときに、  
まずどこをきれいにするか。座敷ではない。むしろ、  
隠して見られたくない部屋を最初にきれいに  
しなさい。でもどうでしょうか。すぐにできます  
か。ふだん忙しいので、なかなか片付けるひまが  
ない。いろいろ言い訳したくなります。それなの  
に、どうして内側からきよめなさいと言うのか。イ  
エスはこう言っていることに注意してください。

「目の見えないパリサイ人。」外側だけを気にして  
内側に対して無頓着な人は、目が見えていないとい  
うのです。

ここで先ほどの質問に戻ります。どうしたら霊の  
目が開かれて見えないものが見えてくるのでしょ  
うか。パリサイ人は外側ばかりを気にしていて、目  
が見えないと言われました。であれば、霊の目が開  
かれて見えるようになるためには、内側を見るよ  
うにしなければならぬ。どこの内側でしょう。  
隣の人の内側ですか。そうではない。まず自分自  
身の内側です。

今朝皆さん家を出るとき、鏡を見て、外側がき  
れいかどうかチェックしたと思います。では、内側  
はどうでしょうか。内側はチェックしてきたで  
しょうか。内側を見るのには鏡はいりません。自  
分の心の中を覗いてみればよい。実に簡単です。そ  
うしたらどんな風景が見えるでしょうか。きれい

に片付いているでしょうか。それとも、片付けなければならぬと思いながら、ずっと手をつけずにしまい込んでいるガラクタが積んだままでしょうか。中には、あまりにも汚すぎて、絶対に見たくないという人がいます。とても自分ひとりでは片付けられない、と途方に暮れる方もいます。

### 3) そうすれば外側もきよくなる

それでもイエスはきれいにしなさいと言うのでしょうか。いいえ。そもそも、自分の力で片付けられないから、隣の部屋に突っ込んできたのではないですか。イエスはそのことをよくご存じです。私の内側には、こんな汚い物が積み重なっています、とイエスに申し上げればよい。申し上げただけで、いったい何が変わるのか、そんなふうに疑問に思うのでしょうか。イエスはなんと言っていますか。「まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば外側もきよくなります。」

自分の内側にガラクタ、つまり罪があると言えるのはどうしてでしょう。霊の目が開かれているからです。霊の目が閉じているなら、罪は見えません。外側だけをきれいにしておけばよいという発想になる。でも、内側に見るようにしていったら、最初は暗がりでも何も見えませんが、じょじょに目が慣れてきて見えるようになる。ああ、こんなに私は汚れている。悲しくなります。でも同時に、私たちは、その罪の真ん中に立っておられる救い主イエス・キリストを見ることになる。あなたが敵に囲まれて、もうだめだと絶望するような瞬間でも、霊の目を開くなら、救いはあなたの内側にある。だから恐れることはない。そのように主は語ってくださいます。